松屋外集

巻一 下

和書門
類 號 函 架 冊
一八八七五 二二四 一四 四

内閣文庫
和書
類 號 冊 架 函
一八八七五 四 一四 二二

内閣文庫
番號 和 18875
冊數 4 (2)
函號 212 128

国立公文書館
National Archives of Japan

筥城天狗、嗤詞、浄瑠璃姫、十二段、油粕、小天狗、保元物語、上、源平盛衰記、八、太平記、廿五、富樫、草子、鞍馬天狗、嗤詞、胡蝶、草子、浄瑠璃姫、十二段、上天乃天狗、旅宿問答、下天の小天狗、同上、法師天狗、源平盛衰記、八、尼天狗、舊本今昔、廿、源平盛衰記、八、天狗法師、古今著聞、十七、天狗小僧、室町殿日記、十九、天狗山卧、照光記、建久七年六月の条、古今著聞、十七、聖財集、中、太平記、十、後太平記、卅七、天狗の若山卧、草子、未来記、我慢邪慢の小天狗、太平記、十、八、同廿五、善天狗、砂石集、八、惡天狗、同上、天竺の天狗、舊本今昔、廿、震旦の天狗、同上、日

浅草文庫

花迺家文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

本第一の大天狗 源平盛衰記、八 木葉天狗、後太平記、十七、同四十一、諸國里人談二、ちごやが天狗、破泥鶏天狗 舊本今昔、廿、荒天狗、真言傳、四、鞍馬天狗、噪詞 供の天狗、舊本今昔、十、鞍馬天狗、噪詞、七天狗、塵囊抄、八、八天狗、神祇破偽顕正問答、内裏雛、四、宝積類書、百廿四、傳の天狗、舊本今昔、十 天狗 矢取、滿仲、草子 天狗道、古事談、三、源平盛衰記、八、太平記、廿五ゟ二處、同廿七、未来記、草子 天狗外道、日蓮録外、四 天狗の法、長門平家、十、源平盛衰記、十八、未来記、草子、烏帽子、草子、天狗の兵法、太平記、廿九、未来記、草子、天狗の姿、参考保元

物語下ゟ二處、大天狗乃姿、同上 天狗の形、長門平家、四、太平記、十一、天狗の顔、源平盛衰記、八、天狗の爪、同十八 天狗の羽、新撰者、同十 天狗の羽、新撰犬筑波集 天狗の手、古今著聞、十七 天狗の爪、小窓雑筆、四、萩原随筆、五、倭漢三才圖會、山禽部、 天狗問答、高野大師行狀画圖二、 天狗の羽音、後太平記、十七、天狗根性、源平盛衰記、十八、 天狗の法罰、未来記、草子 天狗付、小世継、古事談、三ゟ二處、發心集、一、長門平家、十、同十二、同十五、平家物語、八、源平盛衰記、廿四、明月記、天福二年八月の条、天狗の所為、平家物語、六、源平盛衰記、一、同十一、同廿六、長門平家、十

国立公文書館
National Archives of Japan

二、同十三、續古支談、五、古今著聞、十七、百練抄、五、太平記、二、同廿七、後太平記、廿一、天狗の寝化、伯耆の巻、室町殿日記、十九、北条五代記、七、天狗だけ、平治物語、下、源平盛衰記、十七、太平記、廿三、

天狗人ゝ寝ト、長門平家、十一、天狗佛ホトケ小現ゲン次、舊本今昔、廿、

天狗の妨サマタ古今著聞、十七、天狗の歌なのり免、同上

天狗の栖スミカ、平治物語、二、同八ノ二

ノ成ナル、舊本今昔、十、裴心集、二、同霧、砂石集、一の上、新撰犬筑波集、

天狗の剞笑キヨウ、源平盛衰記、廿

物語、下、平家物語、二、長門平家、五、源平盛衰記、九、義経記、一、

天狗の見せたる夢ユメ、日蓮録、四、

天狗の大會ダイエ、扶桑略記、後冷泉

条、

天狗の迎ムカヘ、舊本今昔、廿、

天狗鬼オニ、牛馬問、二

天狗の雇ヤトヒ、諸國里人談、二

天狗の落文オトシブミ、應仁記、上、應仁別記、

天狗を祭マツル、舊本今昔、廿ノ二霧、

天狗礫ツブテ、本朝語園、十、同契纂異、

天狗荒アラ、十訓抄、一、

天狗倒タフシ、太平記、廿、葛城五、本朝怪談故事、四、

天狗、謡詞、鞍馬天狗、

天狗宴ザヘ、雍州府志、四、本朝俗諺志、四、和語連珠集、五、滑稽雑談、

謡詞、本朝俚諺、六、

鐙倉の天狗堂、太平記、十、日光の天狗堂、日光山誌、鳳凰、正月、下、

来寺の天狗岩イハ、路記百余車、一、熊野の天狗峠タウゲ、同上、同巻、天狗橋、奥羽觀巡聞老志、六、宮城郡、上、天狗のけ橋、東遊雑記、十、天狗の乗物モノ、

太平記、法師の名の六天狗、源平盛衰記、十四、同十五、平家物語、四、長門平家、人名の大天狗小天狗、室町殿日記、せ盗の大将の天狗

兵衛、梅津長者、繪詞天狗の投算、尤草紙上十二段天狗の遊石國

里人談、二天狗櫻、撮鴨曉華、十九天狗の髪、白頭翁まゝ巻柏をふ、本草啟蒙、四十二、天狗の手襁、砌松の事也、本草啟蒙十七、天狗の爪貝、海燕也、本草啟蒙、四十二、天狗菌、坂東方言天狗の腰掛、櫺の釋なる松也、坂東の方言、などの物よりてふ名目いと多し、天狗道まて熱鉄を

呑よりも、佛祖統紀、巻三閻摩羅王宮殿、条に獄卒取王、撲熱鉄地以銅汁寫置口中とあるに似たり、

歌よりてふ、吉野拾遺に、内大臣實守公、

天狗とていとをいはなしいとをしとてる鼻ひく

のうぬ家子なる孫ぞ源氏夢浮橋よりてんぐこまな

どやうれもとあるも、笠澤華塵一の巻に礼祭法

礼記、註疏巻四十六に、山林川谷丘陵能出雲為風雨見怪物、

皆曰神此方の人指て天狗とゝ云ふ、といふるよく
のなるべし、新井君美の鬼神論、倭漢三才圖會、山禽
部、治島の条、物部茂卿の天狗説、服部元
喬の高雄山移文の説、まことに續太平記三寛正三年、
ちど皆これに隣し、
猿樂能の事をいふる条に、俱賓の所為とあるは、狗
品まて人品の對語なるべ、例の音を借て書
らなるべ、又俗に天狗波旬といふは、天魔波旬の誤
なるべ、波旬も惡者惡意惡法の義と、翻譯名義集、二の

巻法華経科註二の上巻などに注せる、天狗の事假寐
夢三の巻の類聚名物考、神祇部、六、雜部、十三、谷響集、二の巻學海餘
滴、九の巻牛馬問、二の巻結毛録、年山紀聞、六の巻閑田耕
筆、三の巻などに論じ、秋苑日渉十二の巻に星の天狗、
龍の天狗、獸の天狗、禽の天狗、草木天狗、石の天狗、
仙の天狗の證を擧ていひたれど、共に天狗の字
に泥ることを免ぬ、年中行事秘抄上巻に月舊記云、

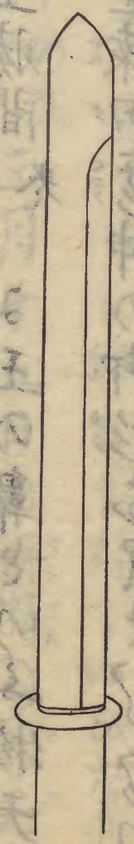
天平勝寶五年正月四日、勘□云、黄帝伐蚩尤之時、以此日伐斬之其首者上為天狗也、其身伏而成蛇靈也、是以風俗、此日、亥時煮大小豆粥而為天狗祭於庭中、案上則其粥上凝時、取東向再拝長跪服之、服者終年無疫氣也云云、拾芥抄、歳時部ふる、世風記を引ていはく、此天狗祭も天狗星を祭ると、天狗星の事ハ、秘苑日渉晋書、天文志中の説を委しくもとめ、諸書を引ていひたるとど、

正月十五日の餅粥の節供ハ

牽合もてやう、玉勝間ハの巻、王の鼻といふ物、天狗面といふこれと猿田彦神の御形ふるまとといふなれど、胡児のこ白氏文集を引て始よりいひたるよ、たのしびすの貴徳楽の舞の面、まこと王の鼻也、とこそいへ、王鼻の事、和語連珠集三巻本朝怪談故事四巻神道名目類聚抄三巻などふ又ゆ、

第二鎗棒薙刀考

剣ハ物を貫くより乃名ゐて、都良奴支を約て都留伎といひ、太刀は断切器なれぞ多知といつ、劔も切先諸刃ゐて、やさのまて片刃なれば、はらぬくふゝ、断切ふを便より、ほれぞ劔太刀とゝ、劔とはみゝいる也、その圖、



都留伎。曰都留伎
太知。亦曰都留伎乃
太知。切先諸刃。

かくのごとく、後の小烏丸の太刀、此遺製なり、萬葉集、二巻、卅一丁左 柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女長歌小劔刀於身副不寐者云云、又 四十一丁右 吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂長歌ゐ劔刀身二副寐價牟云云、同三巻 五十八丁左 安積皇子薨之時内舎人大伴宿祢家持長歌小劔刀腰尓取佩梓弓靫取負而云云、同四巻 卅二丁右 笠女郎贈大伴宿祢家持歌小劔太

刀身尓取副常云云、又、三丁左山口女王贈大伴宿祢家持歌ゟ劔太刀名惜雲吾者無云云、同五巻九丁左山上臣憶良哀世間難住長歌小麻周羅遠乃遠刀古佐備周等都流岐多智許志爾刀利波枳佐都由美乎多尓伎利物知提云云、同九巻十九丁右詠水江浦島子及歌ゟ劔刀已之心柄云云、同十一巻十三丁右寄物陳思歌小劔刀諸刃利足蹈云云、又劔刀名惜云

云、又、六丁右問答歌小劔刀身尓佩副流丈夫也云云、又劔刀諸刃之於荷去觸而云云、又劔刀身副妹之云云、同十二巻十六丁右寄物陳思歌ゟ劔太刀名之惜毛云云、同十三巻三丁左長歌小劔刀齋祭神二師座者云云、又七丁右長歌ゟ劔刀鞘従拔出而伊香期山云云、又九丁右長歌小劔刀磨之心乎云云、同十四巻三丁右未勘國相聞往来歌ゟ都流伎多知身尓素布

伊毛乎云云、同十六巻十八丁左境部王詠數種物歌ふ、
蛟龍取將来、劔刀毛我云云、同十八巻廿一丁左大伴宿
祢家持賀陸奥國出金詔書歌ふ梓弓手尓等里母
知弖、劔太刀許之尓等里波伎云云、同十九巻十四丁左
墓振勇士之名歌ふ梓弓須恵布理於許之投矢毛
知千尋射和多之、劔刀許思尓等理波伎云云、同廿
巻五十一丁左家持歌ふ都流藝多知伊與餘刀具倍之

云云、などある皆一種の名ふ、古事記中巻景行段倭
建命御歌ふ袁登賣能登許能辨尓和賀淤岐斯都
流岐能多知曽能能多知波夜熱田大神縁起亦同云云宇治拾
遺物語六巻廿二丁右僧伽多行羅刹國事条ふ
の太刀はてゝきんつゝ百人云云、東寺文
書抄二巻寛正四年十月廿二日、京進日記ふ
の刀壹ぢ、やゝ壹ほん云云、などゝあゝさゝ社バ

都留伎能多知とゝ。都流藝太刀かゝ。省ても都留伎とゝいる事知べし。神代よりの劔にて物を截ふよゝ云たれば本朝ふゝ不動の利劔などやうの。都て諸刃なる劔ハゝゝて也。さゝと狛劔といるハ。万葉集二卷、卅四丁右。韓土の物なゝ同十二卷、十五丁左。三卷廿四丁右。ふハ。劔柄のこのもゝの環ふよりて。狛劔輪とはゞゝるよいて。

ゝ古事記上卷ふ。故切其中尾時。御刀之刃毀爾思怪以御刀之前刺割而見者在都牟刈之太刀。故取此太刀思異物而白上於天照大御神也。是者草那藝之太刀也。とある都牟刈の都牟ハ。先ハ尖ゝて。物を貫よとゝゝよりさいゝ。後世ゾブト徹スなどいふゾブゝゝ同語ゝ。刈ハ刈断義ゝて。都牟刈之太刀ゝゝ都留伎能多知といるおなじ。冠辭考。

六巻十三丁左 古事記傳、九巻廿五丁左 などの説いひ盡さず、

ゝ神代記下巻十七丁左 小、大伴連遠祖天忍日命、帥

来目部遠祖天槌津大来目背負天磐靫臂著稜威

高柄手提天梔弓天羽羽矢及副持八目鳴鏑又帯

頭槌劒而立天孫之前遊行降来云云、頭槌此云箇

歩豆智云云、神武紀十一丁左 小、道臣命乃起而歌之曰、

云云、勾鷲都々伊、異志都々伊毛智于智氐之夜莽

務時我卒聞歌俱拔其頭椎劒一時殺虜無復噍類

者云云、神功紀元年十二丁左 歌ゝ、句夫莵智能、伊多氐

於破瀰破云云、釋日本紀九巻八丁左 述義五小、頭椎

劒私記曰其頭曲云云、同廿三巻十三丁左 和歌一小、勾

鷲都々伊頭槌槌也、私記曰劒名其頭曲異志都々

伊石槌槌也、私記曰劒名其頭似石也云云、同廿四

巻十三丁右 和歌二小、勾夫莵智劒名也云云、日本紀纂

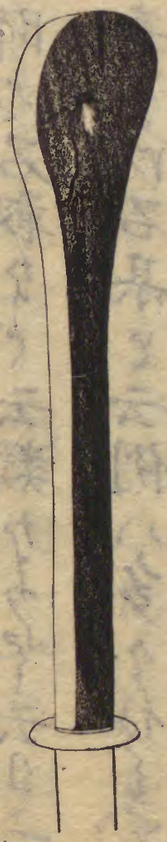
疏下巻 六十九丁右 小頭槌者劍首如槌也今隼人所帯之劍有此形也云云神代口訣四巻 四十丁左 ヨ頭槌劔鋒如槌云云日本紀通證八巻 サ七丁左 ヨ勾鷲都々伊頭椎也見下文鷲濁音古事記作久夫都伊及知異志都々伊毛智持石槌也私記曰劔名其頭似石一説以頭椎劔摧破強敵比石椎而非別有此劔也云云古事記上巻 小故爾天忍日命天津久米命二人取負天之石靫取佩頭椎之太刀取持天之波士弓手挾天之真鹿児矢立御前而仕奉云云又中巻 神武段歌小美都々々斯久米能古賀久夫都々伊々斯都々伊母知宇知豆斯夜麻年美都々々斯久米能古良賀久夫都々伊々斯都々伊母知伊麻宇多婆余良斯云云古事記傳十五巻 ヒ十八丁右 ヨ劔の頭石ふて槌の形ふ似たるを大和國三輪山のあゝちの

土中より堀出なすと云を見るすと、谷川氏いを
すよ云云。同十九巻丁右ふ。久夫都々伊云云。都々
伊ハ槌と云ふ。ちなみて槌を上代ふゑ常ふゑ都
々伊と云ふ。歌ふ言の譏ふ任せて。延て
こゝは云なせるふゑあるべ。さて此も一の刀代
名ふゑ非ず。一種の製ふゑ。此ハ即上ふ毎人佩刀
とある。其刀等なり。伊斯都々伊母知ハ。石椎以な

る。石椎ハ即上の頭椎と一物なると彼ふ形ふ以
云る名。此ふ其ふ石以作る由の名ふて別物ふ
ふあらぬ云云。師ふ石斧などゝ云類なりと云
きぐ。そふ堅ふ意ふ以石某と云例ハ多々ぐゑ。み
な伊波とゝて云き。伊斯と云ふふなり。私記ふ其
頭似石と云ふゑ非ずと云云。などゝ云ふる頭椎
之太刀ハ頭の廣く大ふて。槌の形ふ似るより

いるなり。ある突貫くたゑみあらで打断きり
よみみ造すたゑんとバツルギとゝらづゝらば
必多知と云ゞ。其形

頭槌之太刀一
名厳槌之太刀。



このく頭を重くして。打切ふ強くあるべて便よま
製ちゝくおぐゆ。石槌ゝ厳槌みてぷゝんーよよー

の名なり。厳矛などゝ同義ときあり。伊加之のかを
省て伊之都々伊といふべし。鈗頭ゝ石ゝて作れり
とゝはいのふゞ代。古事記傳ふ頭椎ゝ石椎ゝ同物
異名のよゝ云ゝるゝゝうゝぐゝゝ。古事記上巻ふ。
於是阿遲志貴高日子根神大怒曰我者愛友故弔
来耳何吾比穢死人云而拔所御佩之十掬鈗切伏
其喪屋以足蹶離遣。此者在美濃國藍見河之河上

喪山之者也其持所切太刀名謂大量亦名謂神度
劔度字以音云云とあるか大量神代紀下巻三丁五ふて其
帶劔大葉刈刈此云我里亦名神戸劔とあて大量
の名義ハ未考蓋草木の葉などを刈ま便よりは
をの名ふ草薙劔といふもよりあるてきまは神
度ハ頭尖なる頭大ふて夫ゆゑの名ふる
べし加夫と加牟通音なれば頭椎の加夫のごとく

先廣く大きくて利ごるまたるより疑ふこの所なり
其圖

神度劔一名大葉刈劔

和名抄征戦具部小四聲字苑云似劔而一双曰刀
大刀和名太知小刀加太奈云云まる四聲字苑云
似刀而両刃曰劔今按僧家所持是也云云まる廣

雅云屬鏤劍也。文選讀豆流岐云云。とあるにて。片刃の大刀を多知といひ。小刀を加多奈といひ。両刃の剣を豆流岐といふよし。差別明なり。冠辭考。六の巻

古事記傳九の巻

小古ハ両刃のみにて。片刃なりてしといふハ劔刀諸刃之於荷去觸而。万葉十一巻

刀諸刃利足踏同上

などあるふ据て惑てるなり。片刃のを加多奈といふなり。片雜の義にて。小刀ふハ限

まづ名なれど。都て小刀ふ加多奈といひ。大刀ふを多知といひ。近世古墳より堀出る物。なとの片刃の太刀なれば。古代より片刃の製あるー事疑なくその劔頭の諸刃なるは都留伎太知とも。都留伎能多知とも。省て都流伎ともいひ。通身片刃の大なるとを多知。小なるを加多奈といふ。漢土ふも。短刀。長刀。腰刀。などみな片刃なり

一事、武備志百三巻、百四巻、を閲て知べし。僧家ふた不動の利劔などゝまねびて、通身両刃の劍も用ひられど、普通の劔太刀ハ、必鋒ぞこのみ諸刃なり。然て男子ハ劔太刀を帯るゆゑ、その鋒を柄を附て、鋒と名ばゝて、兵杖とも、後ハ鑓といふこれ也。女子僧道は懐劔隠劔などの刀をもて持てゞ、そもゝ柄を附て薙刀と名づけ、兵杖を用ひたり。

長門本平家物語十巻、衣笠城、軍事、条ゝ、ふるゝなどゝあるを女刀とゝ書たり。矛は秀木にて、執持て、立る貌の、高く秀たるゆゑ、此名也。柄ふる木を用ゐ、秀木ゝ

いなゞ。あれて金槍、鉾中行事秘抄、下巻十一月、鎮魂歌、カナボコ、新撰字鏡、金部、鉞、加奈保己、鉾、保己、鉾、保己乃佐支、などゝえ、延喜、大神宮式、同、兵庫式、鋒、金、戟料の鐵、などあり。木槍、年中行事秘抄、下巻十一月、鎮魂歌、キボコ、とよみ、字鏡集、木部、椎、鉾、矛、同、ホコ、キボコ、と見え、軍防令義解、槍者木、両頭、鋭者、とゝあるも、槍桙の字も、木製の物なるゆゑ用ひなるべし。の

別あるべし共に儀仗軍器に用ひ、鋒は剣の属を著、或花などを著たるしあるべし、兵庫式に鋒なし、花槍みゆ鋒なし

物ハ後に棒とよぶ、比々羅木八尋矛舊事紀、景行段、古事記、景行段の類也、されど杜谷樹八尋桙根文武、大宝二年、紀

あれども、これも鋒あるべくも、倭名抄、刑罰具部に、

蔣勦切韻云棒音蚌杖名也、字亦作桾俗音方とあらこれなるべ、棒、桾、棓、通用の字、一切経音義十四の巻二丁右に棒、白項及、俗字也、字書

打也、正、或作棓、考聲大杖也、説文擊也、従木也、同世三の巻二丁右に棒、字正、宜作棓、或亦為桾、今経本作棒、字乃是棒杖之棒、非打棓字、然復有従手邉作奉者、乃是棒持之字、轉遠経意也、廣雅曰、棓、箠也、又有木邉作音者、是棓杖之棓、字體也、同世八の巻十丁左に、棓、龍講、及、説文云、大杖也、従木形、聲、字、経従奉作棒、俗字無来處也、同七十五の巻、十七丁左に、棓木、又作棒、同電講、及、大杖也、説文、棓、梲也、字従木、梲、従活、及、韻會小補十一の巻講、韻の獨音に、棒、部頌、切、説文、梲也、本作棓、从木、音、聲、謂、木杖、魏志云、曹操為北部、尉門、左右縣五色、棓各十枚、今作棒、廣、韻又打也、或作桾、集韻亦作榔桾、などみえるべて知べし、

棒の倭語は、齊明紀に、ツカナギと訓なる、倭名抄に、俗語のバウといるべし、載られたり、又都

恵とゝいふ。看督長の執持る白杖は職原抄、聞書、撿非違使、条ノ、看督長トテ、別當ノ召具スル也、皆赤キ狩衣、白キ布衣ヲ著也、白杖ヲ持テ、雑人ナド追捕也、とゝ由、漢籍ノ白梃、漢書、諸侯王、表、五代史、王晏球、傳、賈、誼、新書、一、過秦論、下、品字箋、景聲第卅六、景諧、梃、字、抱朴子、至理、篇、三注、白棒、南史、宋、後、白棓、南史、宋、後、なゝ、いゝ才圖會、器用、六、慶帝紀

るゝ類、みな、體源抄、九、巻、舞、譜、皇麞軍蘇利古の名目、条執物ノ、白楚とあるゝ、同物なるべし、元亨釋書、十七の讃州刺史高公輔傳ノ、詔、公輔、刺史理、公輔向寺入、

殿坐、一席、以白杖指揮、曰云云、とみえたり、看督長この白杖ふひとしまゝ平家物語一、巻、廿九丁右、鹿谷段ノ、法ニ任ヨト宣旨ヲ被下、其時神人白杖ヲ持テ、彼聖ガウナジヲシラゲテ、一條ノ大路ヨリ南ヘオツコシテケリ云云、此白杖は古事談、五、巻、砂石集、二、上巻、地蔵之看病、給事、条、太平記、参考本、廿九巻、神木御帰座事、条ノ二、霧、などふゝ出て、神人などゝ警固の為ノ、執持る白木の

棒なり漢書十四 巻 諸侯王表注に應劭曰白梃大杖也孟子書曰可使制梃以撻秦楚是也とあるなれど白木の棒なる事知べし聖ご項をさらぐべしといるは白杖にて打て白状せさるるよしの語也

棒ふを鉄棒日蓮録外書廿二参考太平記八同十四同廿二後太平記十八同廿九なぐるカナ棒参考太平記八同十七同廿二同卅一なぐる金材棒とえゆ

木棒義経記三棒同四はいちひの棒堀川夜討草子に白柘植の棒志田草子にはぐの棒参考太平記十七同廿九に樫木ノ棒北條五代記五に樫の六角棒の石突うはぎの木棒青木の木棒家中竹馬記重編應仁記三守武千句なぐる木棒などあり木棒のあり木棒を字面輟耕録廿三鞠獄の条に見ゆ

又はさい棒義経記二太平記卅六明徳記中塵添壒嚢抄三とそいふを折もて為に木を裂て造るゆえふを佐支棒ちゝと音便によるる也真木裂檜のはもでなどいひ和名抄工匠具部に柊楔漢語抄云散伊都遅とあるふり裂槌の義にて物を打裂に用る槌なればな

るべし、さて杉材棒太平記、見上金材棒、宇治拾遺、さん杖、宇治拾遺、
一金杖、舊本今昔、廿、宇治拾遺、十三、鉄杖、酒顛童子、鐵杖和名抄行旅具部筋
金渡したる捧、北條五代記、五室町殿日記十九、などの名目枚挙ものべ
べ、捧をつゝ手に名々信田草子、堀川夜打草子、など
ふ出たる、漢籍は金材棒、六波羅密鉄棒、琅耶代酔多經、三鉄棒、編廿二拂
の鉄杖、後漢書、郅惲傳、續一切經などに見えた
条、宋史、韓世忠傳、鉄矟、音義八
るゝ、さゝの鉄杖は異なるものゝ、さゝ馬縞の中

華古今注上条ふ車輻、棒、漢朝執金吾金吾杖棒也、以
銅為之黄金塗両末、謂為金吾、御史大夫、司隷校尉、
杖得執爲御史、校尉、郡守、都尉、縣長之類、皆以木為
吾爲用以夾車故謂之車輻一曰形似輻故謂之車
輻也、琅邪代酔編八の条、金ふ棒者、崔豪融注、車輻
也、漢朝執金吾金吾杖棒也、以銅為之黄金塗両足
御史大夫、司隷校尉、杖得執爲形似輻故曰車輻、曹

操為洛陽北部尉乃懸五色棒于門以威豪猾馬編中華古今注

魏志武帝記一裴松之注ヨ曹瞞傳曰太祖初入尉廨繕治四門造五色棒懸門左右各十餘枚有犯禁者不避豪彊皆棒殺之魏書七十四の巻

尒朱榮傳ヨ又以人馬逼戰刀不如棒密勒軍士馬上各齎神棒一枚置於馬側至於戰時不聽斬級以棒棒之而已慮廢騰逐也北史四十八の巻尒朱榮傳ヨ神棒を袖棒ヨ作ル文ヨ異同あり可考合北史六十六の巻

泉企傳ヨ仲遵泉企次子也一名恭云云及長有武藝高敖曹攻洛州與企力戰拒守矢盡以棒杖扞之為流矢中目不堪復戰云云三才圖會器用六巻ヨ訶棻棒鈎棒提棒杵棒白棒柧子棒狼牙棒右取堅重木為之長四五尺異名有四曰棒曰榆曰杵曰捍云云などかれ所見おゝし棒の短きまでちゐゞ木といふ平家物語十一同長門本十八盛衰記四十三義經記二日蓮録内

書、七報恩抄、下、明徳記、てゝ長くとを引手切て短く中、室町殿日記、十七、

せーよーの名ふゆ、又ハ手握木の義ふてゝある

ゞー、膝倭名抄、織機具、部ふ、孝徳紀ふ、金巾をコ織膝、知岐利とみゆ、幅倭名抄、冠帽類、部ふ、幅、和名知岐利、加宇ヌ利と訓ふ、かゞ利輪皷形の物ふいふゝ、手握の義と知たゆ、契約ふチギリといふゝ、

神代紀上巻ふ、陰神握陽神之手遂為夫婦とあるふ起ふる詞といふ、齊明紀ふ以棓戦とあゝ棓ゝ、

握小直木ふて、加と古ハ通音也、小物ふ古といふる例ハ、小羅、小馬、小芝、小菅、小草、小芹、小弓、小島、小身狭、小坂、小宅、小松、なゞ、おとのふ、ナギハ直木也、神名式、上ふ、大和國宇陀郡都賀那木神社あゝ、ふゝゝゝ楛ふよれふ社名ふゆ孝徳紀、御歌ふ、舸娜紀都該、阿我柯賦古麻、小直木を馬の足ふ結付て、ほゞゝゝゝゝゝゝゝゝ大祓ふ、天津金木、天津ハ天津神の事なゝバ冠らせいふ、金木ハ直木なゝ文選東方朔

この答客難の古訓は、蓬カナギ、注は小枝也、倭名抄、刑罰具部は、鉗以鉄束頸也、和名加奈岐、また鈦脛皆也、和名同上、此ハ金ふて製たるいで、古くハ木製の物なるべし、加奈木ハ、皆小直木にて、ちぢれ木よりも小し長はなり、ごー、同部は、笞和名之毛度、若木、樹字を訓モトと訓も、若小木の義也、色葉字類抄、志部は、笞、シモト、撫擊也、とそみゆ、杖和名都恵、とある

い同属也、今世ヂツテイといふものハ、笞挺の字音

ふやうに、馬鞭と同物ふて、和名抄、鞍馬具部ふ、野王按鞭ハ音篇、和名無知、俗云布久、馬策也、策音冊、字亦作策、馬檛也、檛音花所以策馬驅遲也、と見ゆ、策、左傳文公十三年、同襄公十七年、呂氏春秋、審為篇、策、韓非子、外儲説右下、傳、拂、琅邪代酔、漢書、項籍傳、文選、朴同上、箠、呂氏春秋、審為篇、漢書、吾丘壽王傳、文選、司馬遷報任安書、唐韻、慧琳音義、二十三、檛、説文、五代史、楚世家、五音集韻、韻會、唐韻、慧琳音義、廿三、馬棰、左傳襄公十七年、注、馬箠、史記、陳餘傳、同劉敬、説苑、建傳、唐書、封常傳、小箠、説苑、本篇、大箠、同上、鞭箠、文選、司馬遷報任安

書、韓非子、外儲説、右下、傳、唐書、竇軌傳、元史、徐世隆傳、盛載記

擊捶、文選、賈誼過秦論、注、馬檛、左傳、文公十三年、注、漢書、吾丘壽王傳、注、後漢書、王常傳、注、

手檛、元史、世祖紀、

鞭檛、起世因本經、第八、

檛杖、漢書、匈奴傳、注、

鞭杖、蜀志、先主傳、注、吳志、黄蓋傳、北史、魏、世宗紀、

馬策、吳志、孫策傳、晉書、謝安傳、などみゝ

さの類なり、鉄製ふせ(ノガ手ヅクリ)は、和爾雅、五の巻、

鉄鞭、ナムチ、とゝえ字面ハ宋史、呼延賛傳ヨ出(イデ)、三才圖會、器用六、

小其圖を載たる、

大鉄鞭、五代志、安重榮傳、

鉄馬鞭、晉書、王澄傳、

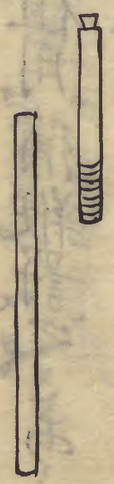
鉄檛、抱朴子、祛迷篇、五代史、義兒、存孝傳、同耕録十四、忠烈、条、續資治通鑑、宋、大祖、建隆元年六月注、馬鍾、淮南子、道世祖紀、

矛鋋、漢書、晁錯傳、

鉄尺、元史、應訓、注、

鉄把短矛、同注、などゝ同物なるべし、後漢書、劉寛傳ヨ、吏人有過(ハレ)、但用(テ)蒲鞭罰之(スベシ)とあるを善政の設(マウケ)として、倭漢朗詠、帝王部ヨ、江相公の、刑鞭蒲朽(テ)螢空去(クル)と作られる、出處也、されば、金木(カナギ)棓(ツヅギ)ちゝ(ノ)木、笞(レモト)杖(ツエ)棒(ボウ)白杖(ブチ)笞(ゼッテイ)挺(ツヅエ)などゝ、長短(オキミジカキ)竹木(タケキ)鉄製(カネヅクリ)のゝもぢめ

こそあれ、いつれも鋒のなき柄ばかり、武徳編年集成七巻 永禄七、八、十五の条 みハ、叁河にて、細井勝久の棒の師と打倒せ事ゝ見ゆ、



圓光大師画詞傳所載笞
圓同書所載チギリ木圓

矛、槍、矟、戟、鋒の字いぶとも通ずて保古とよみ、

瓊矛 古事記、日本紀、舊事紀、神皇正統記、著鏑之矛 舊事紀、古語拾遺、茅纏矟 日本紀、釋日本紀、平文鋒 左經記、金銅鋒 百練抄、赤矛 日本紀、黒矛 同上、廣矛 日本紀、舊事紀、長矛 日本紀、日矛 日本紀、両頭槍 日本紀、釋日本紀、令義解、手鋒 参考保元物語、盛衰記、庭訓往来、異製庭訓往来、砂石集、雑々拾遺、なゞゝよえ、義経紀、四巻十一丁、右鎌槍 三代実録、鯰尾槍 同上、などの ふゝそのの体なるべし、鎌槍 実録、鯰尾槍 同上、などの名目あるも、不空羂索経、四の巻ハ、花棒とあるは、花を首ハせ一柄なるべし、不空羂索陀羅尼自在呪経、中巻ハ、叉棒 叉頭の鋒の図、年中行事、画巻畫棒といふ、又由、枝ある物ゝ後の十文字鑓の祖といふべし、

本朝軍器考、圖説上巻ハ、山城國、静原二宮、社蔵、天武

天皇御鉾、南都正倉院、蔵聖武天皇御寶物、圖、御鉾、の圖子載たるを、いづれも今の鑓の製ふ隣り、御即位調度圖、礼儀類典、畫圖、巻ふも、手鉾、三俣鉾、振鉾、橘窓自語ふ、振鉾ハ吉野記ふ延舞、参語抄ふ鹽夫、など書ふ、樂書ふも厭舞とも、うくて、皆假借にて、エンブとよむ。ふ太平樂桙、秦王桙、の圖あて鎗、社名ふ吾妻鏡三の巻ふ、長鎗刀、刊本ふナガボコと訓たるを、尺素往来、撮壤集ふ、遣刀をヤリとよみ、應仁別記ふ長鎗、などあるなど合せ考ふ、ナガヤリと訓づよなり、

太平記十五巻ふ、土矢間ヨリ鑓長刀ヲ差出シテ、散々ニ突云云、又廿五巻阿間了願ト名乗テ云云、柄ノ長サ一丈許ニ見エタル鑓ヲ、馬ノ平頸ニ引添テ云云、又廿九巻鑓ヲ以テ、胛骨ヨリ左ノ乳ノ下ヘ突徹ス、突レテ鑓ニ取付、指タル打刀ヲ拔ントシケル云云、又卅巻和田ガ中間走懸リテ、鑓ノ柄ヲ取ノベテ、喉吭ヲ突テ、ツキ倒ス云云、又卅七巻鑓長刀打

物ノ衆云云、下學集、器財門ニ、鑓和字欠云云桂川地蔵記上巻ニ、長鋒者朱鐏黒塗銀装束、實天九郎也云云、などゝえ、後三年画巻、宗俊画巻などに、ふるき圖あるに、堀川院の比、槍の製変て、今の鑓の貌なり、

やりといふる名ハ、鎌倉将軍の代よりおこるなるべし、日夏繁高ご武林原始一の巻に、或記曰、右大将嘗製長槍授島津忠久、俗号十文字といふる舊記家牒などに据とる説ハあるとも、雑々拾遺六の巻に、和田賢秀、暦應年中、手鉾より工夫して鑓をはじめるといひ、倭事始三の巻に、楠正成作ときいふ、共ようなるべし、鑓の字ハ遣付る兵仗なるべしとて、三才圖會人事七巻に、鎗法の条あり、その圖を載たるも、本朝の製に似たり、後太平記廿六巻に、ふた、鎗を五兵の上功とすといふ、

後三年畫巻所載鎗圖

宗後畫巻所載鎗圖

さて其製作ないてるよ。長鑓参考太平記、卅八、應仁記、上、舩田前記、甲陽軍鑑、十九、伊達日記、中、下、應仁別記、應仁略事書、長柄鑓、別所長治記、後太平記、四十二、豊太閤御長柄持鑓、甲陽軍鑑、七、同十一、下、長身鑓、甲陽軍鑑、七、同十四、同十七、北條五代記、二、太閤記、九、倭漢三才圖會、廿一、小鑓、大内問答、手鑓、奇異雜談集、一、大身鑓、太閤記、三才圖會、廿一、十文字手鑓、大閤記、四、十文字鑓、別所長治記、後太平記、卅五、同四十、太閤記、九、室町殿日記、二、同五、甲陽軍鑑、廿、北條五代記、四、太閤記、十五、常山紀談、二、同三、鎌鑓、相州兵乱記、二、永録記、二、天正記、四、北條五代記、四、光源院殿、記、重編應仁記、十七、後太平記、四十二、甲陽軍鑑、七、同十一、上、二、片鎌鑓、北條五代記、四、常山紀談、西、霞、太閤記、四、二、倭漢三才圖會、廿二、鎌鑓、倭漢三才圖會、廿一、鬼灯鑓、守武千句、雑鎗、倭漢三才圖會、廿一、梭鎗、同上、素鎗、同上、双鑓、甲陽軍鑑、九、上、釣鑓、北條五代記、四、二間一尺鑓、北條五代

記
八、三間鑓、北條五代記、八、太閤記、四、二尺余鑓、室町殿日記、三、是八穂の丈をいふ
な、柄長一丈許鑓、太平記、ア、青貝柄鑓、甲陽軍鑑、十、下、竹柄鑓、
三好成立記、甲陽軍鑑、九、上、赤鑓、室町殿日記、廿、朱柄鑓、碎玉話、三、常山紀談、一、同二、
白柄鑓、碎玉話、三、虎尾投鞘鑓、太閤記十七、其具をいふ小鑓
の鐏、參考太平記、廿五、大内義隆記、室町殿日記、四、甲陽軍鑑、十六、鎗の柄、參考太平記、廿
五、同卅、同卅八、同四十二、相州兵乱記、二、三好成立記、別所長治記、後太平記、四十二、豊太閤御事書、甲
陽軍鑑、七、同九、上、同十、下、同十一、朱鐏、黒塗銀装束、

桂川地
藏記、上、鎗の鞘、太閤記十七、伊達日
記、二、常山紀談、二、鑓驗、甲陽軍鑑、
十一、下、同
九、鑓掛、同七、其用をいふ小、一番鑓、北條五代記、三小
四、後太平記、卅二、霞、相州兵乱記、
六、常山紀談、二、二番鑓、應仁記、後太平
十三、後太記、廿九、同卅六、三番鑓、甲陽軍鑑、
平記、卅六、鑓合、慕京集、室町殿日記、二、同三、江濃上
鑓、江濃記、勢州四家記、後太平記、卅六、
記、勝鑓、武具要説、七、請鑓、室町殿日記、三、初鑓、後太平記、卅八、最初
鑓、大閤記、十、八、四、毛附の鑓、後太平記、卅六、助鑓、北條五代記、六、横鑓、應仁
記、北條五代記、六、室町殿日記、一、
後太平記、廿三、大閤記、四、同十五、脇鑓、室町殿日記、八、後太平記、

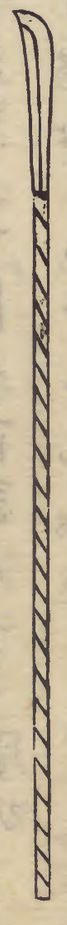
廿六、追鑓、後太平記、廿六相鑓、後太平記、廿六當位の鑓、後太平記、廿六塲中の鑓、同上塲論の鑓、同上鑓問答、同上鑓組、北條五代記、六ヨ二處、鑓突、参考太平記、十五、同廿九、同廿、同廿四、同廿八、細川両家記、下、大内義隆記、長禄記、甲陽軍鑑、九、下、鑓王、大閤記、九、常山紀談、三、武邉咄聞書、八、鑓衾、室町殿日記、二、上杉輝虎申状、大閤記、四、同九、常山紀談、三、鑓下、室町殿日記、四、同七、同八、同十二、後太平記、廿六、北條五代記、三、同七、持鑓、甲陽軍鑑、七、大閤記、一、武具要説、下、役鑓、甲陽軍鑑、十二、の類ものゝおほくゝえ、鑓奉行、甲陽軍鑑、八、鑓持、太平記、廿、新撰犬筑波集、馬具寸法記、

なゞ、やゝ古ヨ名目なり、竹頭を殺て尖ごゝ
したゝと竹鑓といゝ、いと後の物ヨあらゝば、室町
殿日記、二、相州兵乱記、二、北條五代記、六ヨ二處、倭漢三才圖會、廿、長刀は薙刀とも
書ヨ長くして雑拂ふ兵仗なれバさいふなり、奈岐
ハ長の通音也、奈多ハ雑断の略語也、源平盛衰記
四十二、源平、小武藏房、常陸房、舊山法師ニテ、究
竟ノ長刀ノ上手ニテ、七八人歩立ニナリ、長刀十

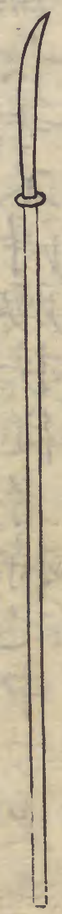
文字ニ採リ箒木ヲ以テ庭ヲ拂ガ如ク雜入ケレバ、とあらし長き刀ゝて、雜ゝ入よゝ也。外記日記、久安二年三月九日の条ゝ、経光驚而執兵仗俗号之奈木奈多云云。愚昧記、久安二年七月十一日の条ゝ、奈岐刀□柄云云。ちぐみえ。後三年記ゝ後のゝ所見ハ、拳ゝ邉なゝ。其圖ハ年中行事、画巻、後三年、画巻、圓光大師、畫詞傳、などゝ。はゞ見ゆゝ。

おゝこゝ。

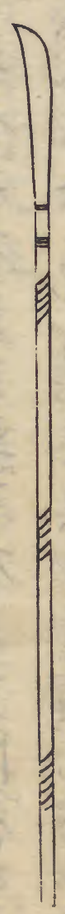
年中行事画巻所載長刀



後三年画巻所載長刀



圓光大師画詞傳所載長刀



倭漢三才圖會せ一巻兵器部ゝ武備志云日本刀有數品。

其大而長柄者乃攝導所用可以殺人謂之先導其以皮條綴刀鞘佩之於肩或執之於手乃隨後所用謂之大制按是乃俗云野刀近世不用之其欄長三四尺又與欄長等不得腰挾從者持之中古更為木桿呼曰奈岐奈太三才圖會所謂眉尖刀一名偃月刀與此相似矣或曰始於光仁天皇朝然和名抄有長刀而無雜刀至平相國公時專感眉尖刀之利常列座右以来尚之如今高家國守之行列備乘輿之後凡長刀為用也可載人可切可擊可捺以兼刀槍棒以為官婦僧醫之重器也といるもいまゞ盡せるゝ說也大長刀源平盛衰記平家物語長門本平家物語義經記參考太平記烏帽子折草子新撰犬筑波集應永記房總治乱記小長刀保元物語源平盛衰記長門本平家物語參考太平記酒顛童子草子文正記なのをおちの草子銀の蛭巻たる大長刀長本平家物語同小長刀同上後三年画詞中雜太刀異製庭訓往来長

太刀、下學集 一文字の長刀、甲陽軍鑑 このねのひさ柄に長刀、信田小剃刀長刀、廻國雜記、異製庭訓往來、高館草子、撮壤集、草子 そりうつくしたる長刀、源平盛衰記 白柄長刀、平家物語、同長門本、庭訓往來、高館草子、景清草子、鞍馬天狗、謠詞、室町殿日記、志松物語、後太平記、北條五代記、菖蒲形長刀、太平記、茅葉の如なる長刀、長門本、平家物語、源平盛衰記、蛭巻したる長刀、平家物語、源平盛衰記、氷の如くなる三尺乃長刀、源平盛衰記、六尺餘の長刀、太平記、銀柄貝鞘長刀、桂川地藏記、長刀の峰、太平記、長刀の柄、長門本、平家物語、太平記、長刀の鞘、長門本、平家物語、長刀の石突、太平記、景清草子、志松物語、甲陽軍鑑、長刀の目貫、長門本、平家物語、鎌倉年中行事、長刀一えぶ、東寺文書抄、甲陽軍鑑、木長刀、滿仲草子、長刀に切手、景清草子、堀川夜打草子、信田草子、鎌田草子、なぎなの名目物ふえ、一名打物とも いふ、ふる敵を打物なるゆゑの名なるよし、愚得隨筆附考上卷の說也、打物、平家物語、長門本、平家物語、太平記、長打物、志松

物語などにもみゆ。義貞記、體源抄、十二本巻などに、長刀の寸法、さて長刀は馬上にて十徳、歩立にて九徳あるよしを記せり。長刀持といふ名は、鎌倉年中行事、馬具寸法記などに出づ。戟、鎗、棒、長刀、共に漢土にもさまざまあり。搗馬、突鎗、雙鈎鎗、単鈎鎗、鏁子鎗、素木鎗、鵶項鎗、錐鎗、梭鎗、大寧筆鎗、拐突鎗、抓鎗、拐叉鎗、標鎗、長鎗、梨花鎗、掉刀、戟刀、龍刀、鎗、鍠、鈀、短刀鎗、短錐鎗、蒺藜鎗、驩耳刀などは槍鑓よりは、桿棒、訶梨棒、大棒、棍、少林棍、鐵鏈、夾棒、提棒、白棒、木鎗、棓木なども棒なり。釣鑣刀、鐵釣鎗、屈刀、偃月刀、眉尖刀、鳳嘴刀、筆刀などは長刀なり。其圖説は、三才圖會、器用部六の巻、武備志百三の巻、百四巻、百九の巻、兵仗記、清人王晫撰載于昭代叢書中、ふみも、さて鐵把、長脚鑽、狼牙棒、鞦鑓などは矛棒の属也。倭漢三才圖會巻一巻兵

哭部 小、長脚鑽、左須末太、又云琴柱棒、鉄把、今云鈋棒、狼牙棒、今云毛知利、三才圖會有長脚鑽鉄把狼牙棒之圖曰、植釘於上、如狼牙者、名狼牙棒、又無刃而鉤者曰鉄把、按長脚鑽有又可以挾敵、曰刺又形似琴柱、故名古止知、鉄把今云鈋棒也、鉄抓今云熊手、狼牙棒今云鋸棒、以上關人門番必用之、不雖傷捻捕、以徽索可霜、とみゆ、倭名抄、十三巻征戦具部 小、又六韜云、又、初牙反 両岐鉄柄長六尺文選、又簇讀沈之、今按、簇、即鏃字也、といる又は、後の左須末多也、室町日記十七巻、小西朝鮮の要害を攻破る条 小、菱のおゝく鉄を以て包たる、けはしきの如くちるちぢる木を持る歩武者云云、又十九巻、淡ヤリ、或はひ流すおゝぢなどふ與事の条鑓、て、間近くさしはゆ生捕ようむと、ゆゝみゝれゝそ云云、とみえたりとバ、左須末多、古止遅しいと後の

名ふさあらびひ弥ヲハ鈩棒の事なるヲ鈩棒左須末太毛知利鞆鑓ヲ行列ふ執持る貌天正記五の条ふみえ番所ヨ鑓把長脚鑽鑓棒など立並たる図東海道名所記二の条ふ載ル甲陽軍鑑七の条ヨ鑓のけとあるは鑓ヲ掛置負也まゝ鑓長刀ヲ諸侯大夫の行列の儀杖ヨ用しハ甲冑ヲ帯して持せバ兵仗也宮衛令義解ヨ用之礼容為義仗用之征伐為軍器即同実而殊号者儀制令義解ヨ用之威儀故曰儀戈などみえて今の侯家行列の鑓長刀ヨ儀仗なるべ兵仗ふさあらびヨ古く鎌倉年中行事社参条ヨ長刀持の力者などあるとど文禄慶長の比ヨ盛ヨ成るなるべそは美麿板太閤軍記畫ふ毛鑓鳥毛鑓長刀ヲ狭箱など持せ行列の図あヲ又北條五代記の画ヲ鑓長刀ふ鞘袋をのけ或ヨ毛鑓々印など粧ひ立狭箱持せたるさあヲ老人雑話上巻ヨ秀頼伏見ヨヲ上洛毎ヨ御幸町通を来る狭箱の大きな

る箱よ、人形のあやけたる有て、錢をいれバ轉倒に
るを、前よ歩行の者須て、輿の先ふゆくゝ又云、
狹箱と云れ也、狹竹と云物用ゐるを、大坂
の津田長門守はじめて製ゝと云ゝ、安齋、洗革ふ、
慶長、比ヨリカ、ウハザシ袋ヲ用ル事スタレテ、竹
ヲ切リカケテ衣服ヲ揉テ持セシトゾ、是ヲハサ
ミ竹トイフ、其後ハサミ竹ヲ止テ、箱ニ衣服ヲ入
テ持セシ也、此箱ハハサミ竹ノ代ニ作リ出セシ
物ナルユヱ、狹箱ト名付シ也、云ゝ、秋草、道具部よ、
狹箱の事、古ハなし物也、古代ハ衣服を上ざし袋
に入て、供の者よ持せし也、古画よ此体みえたり、
上ざし袋とハ、衣服をいゝ袋に大ふしふよを、
好よまゝて搬て、口ふたぶをきて、括緒をの〳〵
してゝゝる也、其袋のやうもぬゝえて、糸を少しよて

て、表裏を一ツよさ次也、竪横ふ碁盤の目れやう
よさを、是を上ざしと云也、袋の色、上ざし、寸尺ふ
り法式なし、昔ハ常よあるふきて、珍しきぬ物
也、しつの比よりこの上ざし袋を持ける事すくなく、
慶長の比このかよ、狹竹ヲ割うけ、衣服を
はさみ持せしをいつゝやみ、衣服をいゝ箱を
作出して、この狹竹よりうへだれバ狹箱と名付しと
ぞ云ゝ、和爾雅、五の巻厨箱衣器類部ふ、狹箱古、近
行人、以竹挾衣服或袴等令僕擔之、適寒暖之用、是
號狹竹、今嫌其不便、而造箱、其蓋上施榛、令僕擔之、
元出自挾竹、故號挾箱、蓋自慶長年中始云ハ、書言
字考、器財門、波部よ、摺箱、往古行、他方人、以竹挾衣
服、令僕擔之、充寒暖用、謂之摺竹、近世據之製狹箱、
云ゝ、甲陽軍鑑十九の巻廿六丁、左よ、天正元年四

月、信玄公御他界あて、其秋勝頼公廿八歳ふて、遠州御ましらるの時、草履取廿人、内外の加者共十五人、駒挟竹をもち、惣手の跡よりおくれたるを、敵方の馬乗三騎出、草履取を一人きる所より残て十四人、挟竹ふて馬来を一人打おとし、搦取て、日暮より及び金谷一来て、此生捕をさし上申ハ云く、太閤記十七巻、前関白秀次公事、条々、供奉の人々、具足甲を挟箱にかくし入云く、遺老物語八巻、夫箱は秀吉の扈従小野木縫殿助と云者ゟ巧出してよりて、世ゟ弘く伝ちる也、天草征伐の時ちを軍中ゟ持せらるる大名ゝ有しとぞ云く、常山紀談二巻ゟ、信長の時、狭箱ゝ造て始ちるとい、又大坂の津田長門守造て出ぬとい、云く、ちなみえたるゟ、狭箱の由来知ぬ。

鈎棒とい、ツク棒ちゝ、ツクをもしと打ちる棒なれバ、ツクハ敕の通音ふて、敕なるの長の鉄鈎を打ならべたるゆゑ、敕手俣の義ふてサス手の名とみゆ。長脚鑽、脚ハ又手の呉音なり。ちなて木格棒など乃圖ゝ見ゆ。此書ハ萬治二年の刊行なれバ、作者ハ小田原北條氏の末代世ふまのあて見聞せし事を記したるとバ、永禄天正の比の證とまぐ。参考太平記廿の巻ふ、小鎗持数多走寄馬ノ太腹刺テ刎落サセ、とあれバ、鑓を持たる

兵士の事にて、供鑓の證ふもとぐさ、奇異雑談集一の巻に、應仁乱後云云、中間ハ肩衣よりのぢの内にて、主ハ笠を頭にして、手鑓をこうさぶくてあるゆゑ云云、家中竹馬記九丁ハ、鑓を持ける事、御出仕右などの御供ハ、無為の時ハ、みえ、但持ける事法に有ごとく、應仁の比よりハ多分持也、一本にこれ、是等皆馬上の跡也云云、新撰犬筑波集ハ、高野ひじりの跡の鑓持云云、守武千句猫何に

ゆ[illegible]ろ[illegible]みれ[illegible]ひ[illegible]ぬや

[illegible]ものこのぢ[illegible]む云云、義残後覚一の巻に、

ろち、若黨道具の者云云、此書ハ文禄五年三月の著化ハて、道具の者といふハ鑓長刀持乃事と同由、寛永三年召列人數覚に、二百石若黨二人鑓持一人、甲箱一人云云、千石若黨七人鑓持三人、弓一

張鉄炮一挺、甲箱一人、馬取四人、挾箱二人、草履取二人、小者三人云云、などあるを考るに、足利將軍の代れまゝに、供鑓ハ持せたゝれず、行列ハ粧立るほどの事ハなるべし、文禄慶長などの比、泰平ハ逢ー日、諸侯大夫士、聚落大坂、伏見などハ出仕の時の礼容ハ、立列ーゝものとみゆ、さて東遷の後、その礼式定アて、今のごと厳重ゝなれるな

る、甲陽軍鑑八の巻、十五の巻、ハ、鑓奉行の名もあれど、戦場ハて乃事なれバ、儀仗のをての所役と異也、寶永板の大閤記ハ、行列、警固、番所の儀仗ハ、鑓、長刀、鉄棒、又手俣、もぢるぶ、立並たるとがあるとど、寛永の古板本ハみえず、再板ハさかゝらを加ーゝものゝ、當時の證ハ引用ゝもあらバ、さて矛槍類の説、倭漢三才圖會、廿一の巻 兵器部 本朝軍器考、

七の巻

ふみえたれバ合考ゞ一行列の儀仗ゝ櫜鞬三仗の軍禮ゝ起ゝ古れを建櫜ゝゝゝ古今注上巻櫜鞬三仗の条ゝ起自周武王之制也武王伐紂散鹿臺之財發巨橋之粟歸馬于華山之陽放牛于桃林之野鑄劒戟以為農器示天下不復用兵武王以安必防危理必防亂故彀弓匣劒以軍儀示不忘武也舊儀輜轎三仗首袴額紅謂之櫜鞬三仗也通鑑綱目四十八百廿五丁右唐憲宗元和十二年条集覽ゝ具櫜鞬出迎此軍礼也以示尊敬左傳右屬櫜鞬注杜預曰櫜韜也馬上曰鞬夕建也言弓矢並建立其中也礼樂記曰武王克殷倒載干戈包之以虎皮將帥之士使為諸侯名之曰建櫜鄭玄曰包干戈以虎皮明能以武服兵也建讀為鞬字之誤也兵甲之衣曰櫜鞬櫜言閉藏兵甲也櫜音羔鞬音巨展巨偃二反

又史記樂書曰將率之士使為諸侯名之曰建櫜注
王肅曰所以韔櫜弓矢而不用者將率之士力也故
建以為諸侯謂之建櫜也今李愬具櫜鞬出迎蓋取
此義也かどあるふく知べし礼記樂記の説は家
語辨樂解ふくみゆ秋苑日渉 三の巻 小諸侯儀從引
馬の事をいひらすべし

松屋外集巻之一終

国立公文書館
National Archives of Japan